

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：24501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2021

課題番号：19K23046

研究課題名（和文）対音資料による唐代音韻史の研究 - 初唐期を中心に

研究課題名（英文）Phonological Changes in Tang China According to Transcriptional Sources

研究代表者

橋本 貴子（Hashimoto, Takako）

神戸市外国語大学・外国学研究所・客員研究員

研究者番号：00844416

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、唐代に起きたと言われる軽唇音化の進行状況および微母と日母の具体的な音価について、対音資料を用いて解明することにある。研究によって、7世紀半ば以降には軽唇音の唇歯音化がある程度進行していたこと、微母は十分な摩擦音化および非鼻音化は生じておらず鼻音的要素が保存されていたこと、一方で武后期頃の成立と目される対音資料に日母の摩擦音化の反映が見られることを明らかにした。以上に加えて、義浄の音訳漢字においてサンスクリットの/v/が並母[b-]で音訳される傾向は漢語側の問題に起因するものではなく、基本的にはインド側における/v/と/b/の混乱を反映した可能性が高いことを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、初唐期の音韻状況を明らかにしただけでなく、漢訳仏典や漢訳マニ教文献の文献学的研究にも寄与するものである。更には初唐期に東アジアや中央アジアで成立した対訳資料、対音資料に基づく歴史学的研究についての言語学的基盤にもなりうると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to glean insights from transcriptional sources about phonological changes in China during the Tang Dynasty (618-907), specifically the extent of the dentalabialization in some labial initials and the phonetic values of the wei-initial and ri-initial. According to the analysis, from the late seventh century, dentalabialization was underway to some extent and the wei-initial, yet to be fully spirantized and denasalized, remained nasal. However, the study also found instances in transcriptional sources dated to the end of the Early Tang Dynasty that reflect the spirantization of the ri-initial. Additionally, the author suggests a possible reason why Yijing tended to transliterate the Sanskrit /v/ into bingmu (b-) in his Chinese transliteration of Sanskrit: rather than this tendency arising because of issues on the Chinese-language side, it reflected the fact that /v/ was often used interchangeably with /b/ on the Indian side.

研究分野：中国語音韻史

キーワード：対音資料 梵漢対音 霞浦文書 軽唇音化 脱鼻音化 音訳漢字 義浄 インドの方言音

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

唐代(618~907)の中国北方では数々の音韻・音声変化が起きたと言われている。それら変化の実態を明らかにすることは、中国語音韻史研究における極めて重要な課題である。

従来、唐代の発音に関する研究では、音韻体系の復元を課題として、韻書や音義書の反切、韻図のように、音韻体系全体を網羅的に示す資料が主要な資料として用いられてきた。しかし、これらの資料は漢字という表意文字によって表記されたもので、資料から具体的な発音の情報を直接得ることができない。従って、具体的な音価の推定には、現代方言音や対音資料を参考にする必要がある。

対音資料とは、外国語の発音を漢字で音訳したものや、中国語の発音を外国語の文字で表記した資料のことである。資料成立時の発音を直接かつ比較的忠実に反映しており、音価推定の重要な手掛かりとなりうる。

近年、新しい対音資料が発見されたことによって、唐代の中国語の発音に関する研究状況が新たな局面を迎えている。新しい対音資料とは中国福建省で陸続と発見されている漢訳マニ教文献のことである。その中には中世イラン語の讃歌を漢字で音訳した部分が含まれており、初唐期(618~712)の中国語の発音を反映していると見られる。

従来、初唐期の対音資料として比較的まとまった量を有するものは、梵漢対音(漢文仏教文献中に見られるサンスクリットの発音を漢字で音訳したもの)のみであった。ところが上記の漢訳マニ教文献の出現は、梵漢対音だけでは明確に知り得なかった初唐期の発音の特徴を、中世イラン語の音訳状況をも通して観察することを可能にした。これにより今後は初唐期の発音の研究に大きな進展が見られるものと期待される。

2. 研究の目的

本研究では、これらの対音資料を用いて、初唐期の(1)軽唇音化および(2)微母と日母の音価について検証することを主たる目的としている。

対音資料の中でも、漢訳仏典中の音訳された陀羅尼や漢訳マニ教文献中の音訳讃歌のように音読を前提としたものは、漢訳当時の中国語の現実の発音からサンスクリットやイラン語の原音を再現できるよう、精密な音訳が行われている。また特に梵漢対音の多くは訳出の時期や場所に関する情報がはっきりしている。従って、これら対音資料を用いることで、ある現象の発生時期を高い精度で確定することが可能である。このような対音資料の特性を活かすことで唐代の音韻・音声変化に関する理解をより深めることが、本研究の狙いである。

本研究は、この新出の漢訳マニ教文献と梵漢対音とを用いて、初唐期の音韻・音声変化に関する従来の諸説を検討する。同時に、対音資料による中国語音韻史研究の有効性と限界とを明確にすることで、唐代の音韻・音声変化に関する議論をより厳密なものにすることを旨とするものである。

3. 研究の方法

(1)軽唇音化

唐代以降の中国語では、元々[p-]や[b-]等の両唇音であったものの一部が[f-]や[v-]等の唇歯音に変化した。これを軽唇音化と言う。梵漢対音を用いた従来の研究によって、初唐期に軽唇音化が起きていたと指摘されている。本研究では、初唐期の梵漢対音の新たなデータにおいてサンスクリットの p, ph, b, bh, m および v が、また漢訳マニ教文献の音訳讃歌において中世イラン語の p, b, f がそれぞれ中国語のどのような子音に対応しているかを調査し、軽唇音化の反映が見られるかどうか検討を加える。

(2)微母と日母の音価

微母[mj-]と日母[n-]は元々鼻音であったが、唐代以降の中国語では、摩擦音化によって鼻音性が弱化、更には消失してそれぞれ[v-]、[ɹ-]となった。この変化の反映は、8世紀以降の長安音ないし西北方言を反映する資料において明瞭に確認される。そこで問題となるのは、700年前後あるいはそれ以前に摩擦音化や鼻音の弱化がすでに生じていたかどうかという点である。本研究では初唐期の梵漢対音の新たなデータと漢訳マニ教文献の音訳讃歌における微母[mj-]と日母[n-]の対応状況について調査し、それらの音価について考察する。

4. 研究成果

(1)軽唇音化

8世紀以降に軽唇音化が起きていたことは諸資料における反映からほぼ確実であるが、8世紀以前の状況については主に反切資料を扱った従来の研究において議論が分かれている。そこで、8世紀以前の対音資料を用いて、そこに軽唇音化の反映がどのように見られるかを検討した。7世紀前半の対音資料では、外国語の p, b 等を軽唇音字で音訳したり、外国語の f や v 等を重唇音字で音訳する状況が見られる。これらの状況は資料が基づいた当時の北方音において軽唇音

化がまだ起きていなかったことを示している。ところが、7世紀中葉以降の対音資料、具体的には梵漢対音と新資料である霞浦文書中の音訳讃歌では、外国語の **p**、**b** 等を重唇音字で、外国語の **f** や **v** を軽唇音字でそれぞれ音訳する。このような音訳における重唇音字と軽唇音字の使い分けが、ほぼ同時期の複数の対音資料に共通して見られることから、7世紀半ば以降には軽唇音の唇齒音化がある程度進行していた可能性が高い。

(2) 微母と日母の音価

① 微母の音価

これまでの梵漢対音研究によると、初唐期の梵漢対音ではサンスクリットの **m** は基本的に明母で音訳されており、微母字が **m** の音訳に用いられることはほとんど無い。よって、微母は明母から分化していた可能性がある。但し微母字のうち「文」と「勿」の二字のみは、例外的に複数の対音資料に現れ、外国語の **m** に対応する。それらの例は微母の鼻音的要素が十分に保存されていたことを示している。また微母はサンスクリットの **v** や中世イラン語の **b** 等の音訳にも用いられない。従って、まだ十分な摩擦音化および非鼻音化は生じていなかったと思われる。

② 日母の音価

初唐期の梵漢対音において、日母は主にサンスクリットの **ñ** や **ny** に対応し、摩擦音化および非鼻音化の反映は見られない。一方、武后期頃の成立と目される霞浦文書中の漢訳マニ教文献の音訳讃歌では、日母字「而」に口偏を加えた字が中世イラン語の **z** に対応している。これは日母の摩擦音化を反映している。

(3) サンスクリットの **v** と **b** に対する義浄の音訳方法

7世紀後半にインド東部で10年間留学し、帰国後7世紀末から8世紀初頭にかけて訳経を行った義浄の音訳漢字ではサンスクリットの **v** が漢語の並母[**b-**]で音訳される傾向が強い。この音訳傾向は義浄が滞在した7世紀後半のインド東部では **v** と **b** がいずれも[**b**]と発音されていたことを反映している可能性がある。なおこの発音の変化自体については、6世紀末以降のインド東部において **v** と **b** が同一の字形で表されるようになったことから従来指摘されていた。

ちなみに、7世紀の他の対音資料には唇齒音化の反映が見られる。また義浄の音訳漢字では重唇音と軽唇音がほとんど混じていないことから、義浄当時の軽唇音はすでに唇齒音化を起していたことが分かる。従って、義浄の音訳漢字においてサンスクリットの **v** が並母[**b-**]で音訳される傾向は、漢語側の問題に起因するものではなく、基本的にはインド側における **v** と **b** の混乱を反映したものと考えるのが妥当である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 橋本貴子	4. 巻 73(3)
2. 論文標題 対音資料から見た唐代の軽唇音化について：附論 日母の脱鼻音化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸外大論叢	6. 最初と最後の頁 121-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 橋本貴子	4. 巻 上冊
2. 論文標題 義浄の音訳漢字におけるSanskritの/v/の音訳について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩田礼教授栄休記念論文集	6. 最初と最後の頁 109-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 橋本貴子
2. 発表標題 対音資料から見た初唐期の微母と日母
3. 学会等名 第69回日本中国語学会全国大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------